

ばく りゅう
麦粒

2023. Winter

麦粒／NO. 140

発行・キリスト教センター

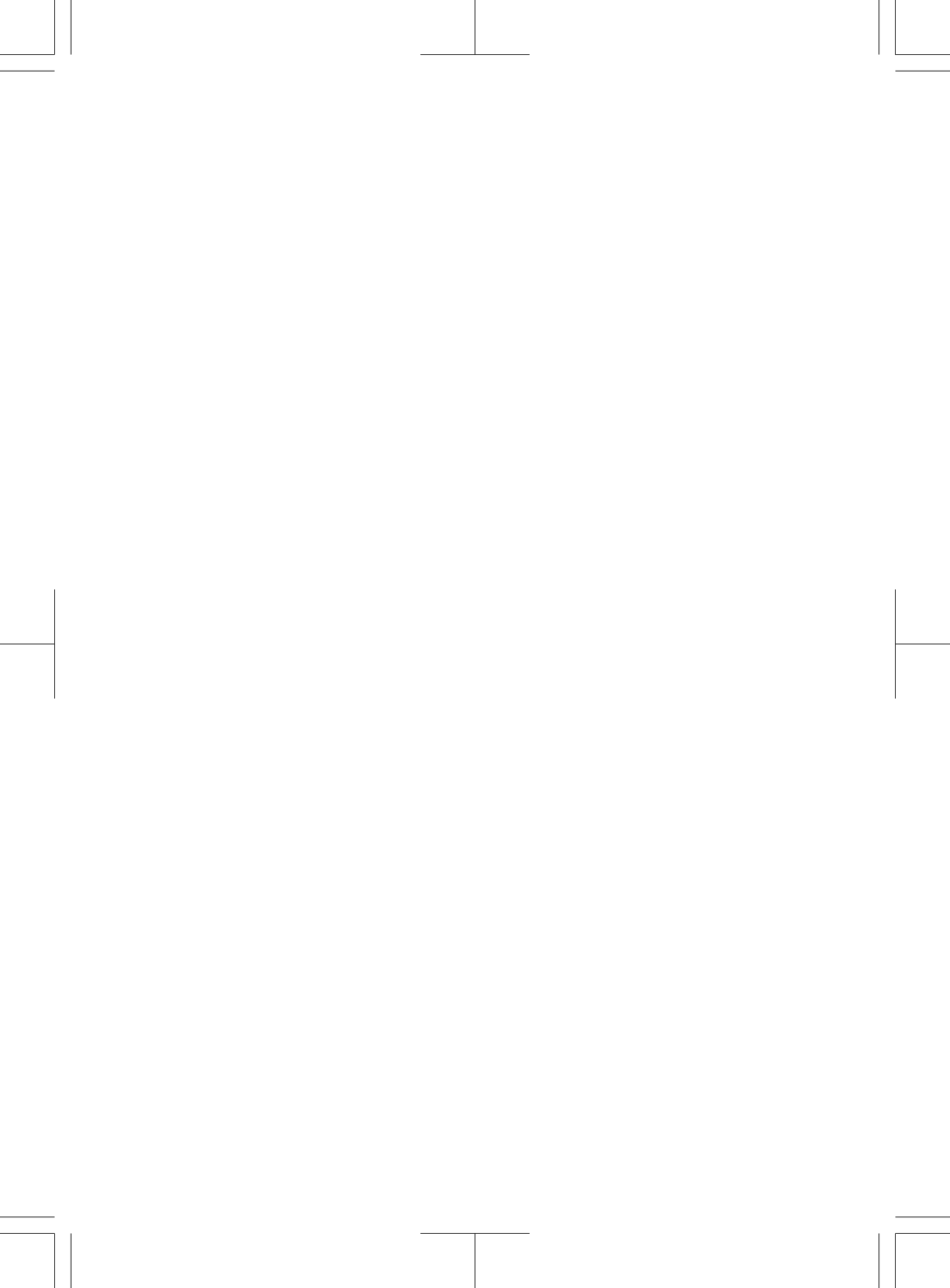
目 次

命をみつめる …………… 藤 森 修 (3)

日本におけるクライン夫妻の宣教活動 1883－1893年
…………… 笠 井 雅 直 (6)

ウクライナと香港と私たち …………… 松 谷 暉 介 (12)





命をみつめる

藤 森 修

私は人の子らについて心の中で言った。「神は彼らを吟味し、動物にすぎないことを見極めようとする。」人の子らの運命と動物の運命は同じであり、これが死ねば、あれも死ぬ。両者にあるのは同じ息である。人が動物にまさるところはない。すべては空である。すべては同じ場所に行く。

すべては塵から成り

すべては塵に帰る。

人の子らの息が上へ昇り、動物の息が地に降ると誰が知るだろうか。

(旧約聖書 コヘレトの言葉 3章18～21節)

医学、医療の研究では、真実の解明や仮説の証明のために必要に応じて動物実験が行われており、名古屋学院大学でも2007年に動物実験施設が設置されて、名古屋学院大学動物実験委員会規定、同動物実験指針、動物実験施設使用細則を制定し動物実験委員会が設けられました。その後、本学では主にマウスやラットなどの実験動物が教員の研究、学生の実習や卒業研究に貢献してくれています。また、直接動物実験に携わっていないリハビリテーション学部、スポーツ健康学部の学生であっても、知識の習得の中で間接的に実験動物から多大な恩恵を受けて

います。そこで動物実験委員会では、科学の進歩の一端を担う動物たちの命に思いを至らせ感謝するために、キリスト教センターの協力を得て毎年実験動物感謝記念礼拝を開催しています。

動物実験については様々な意見や考えがあります。思い返してみれば、私自身も学生の時に学生研究員として病理学の研究室に在籍して以来、動物実験に携わって50年になろうとしています。この間、細胞培養、ウィルスやバクテリアの培養と感染実験、実験糖尿病、軟骨形成不全マウスの開発をはじめ、様々な動物を用いて研究を行ってきました。私自身はむ

やみに動物実験を行うことを容認するものではありませんが、医学研究における必要最小限の動物実験は不可欠であると考えています。

ところで、動物実験が医学や医療、健康や福祉、科学の進歩をもたらしていることは、一般の人々にもある程度理解されていることと思いますが、それらの成果によって実は動物の医療も進歩向上し、動物の福祉にも大いに貢献していることはあまり知られていないようです。実際、コンパニオン・アニマル（古い言い方ではペット）や家畜はもちろん、野生動物や魚類についての医療も、動物実験の環境整備が進むにつれて格段に進歩してきました。動物実験は単に人のためだけに行われ、人ためだけに役立っているのではないことを、この機会に皆さんにも認識していただきたいと思います。

しかしながら、動物実験においては多くの実験動物の命が失われることも、また事実です。失われた命に対して、十分に説明できる成果を上げているか、知識を会得したか、我々は常に自問することを忘れてはなりません。

人をはじめとする動物は例外なく他の動物や植物を食物として摂取し、そこからエネルギーや栄養を得て生命を維持し

ています。「生」、すなわち、生きるということは他者の死の上に成り立っています。さらに我々医学、医療について学ぶものにとって、修得する医学の知識、医療の技術は、数え切れない人々の死や実験動物の死から得た知識を積み上げて進歩してきたものです。

そして、医学の発展、医療技術の進歩により、医学研究はマクロからミクロ、さらにナノレベルへと踏み込み、移植医療、生殖医療、分子生物学、遺伝子工学などなど、様々な分野で一日一日を単位とするめざましい進歩を遂げつつあります。これらの進歩により、今や生命誕生や生命の維持までもが、機械化・工業化・産業化が可能な時代になろうとしています。本来、漠然とではあっても、誰もが分かるように始まり、誰もが分かるように終わった命も、このような時代になると、個体の誕生はいつ始まり、いつが終わりなのか判然とせず、移植医療の進歩の下では、その命は誰のものなのか、命の実態さえもが不明瞭になりかねない状況も生まれています。もしかしたら、それが命の重みを感じない人間や社会を育ててしまう原因のひとつになるのではないかと、危うささえ覚えます。しかしながら、そういう状況の一方で、私の目の

前には皆さんがいるし、皆さんひとり一人の周りにも大勢の仲間がいて、見渡せば我々は確かに息づいている多くの命に囲まれています。

命の実態が分かりにくくなっている時代であるからこそ、医療や福祉に携わる者は、目の前の命、身の回りにある命を慈しみ、尊ぶ心が大切になって来ると思っています。動物実験に臨む場合も、実験のために動物を飼う、という意識ではなく、実験のためであっても、「命を養う」という気持ちで接することが大切だと感じています。

日頃のカリキュラムの中では、これらの実験動物に限らず、ひろく生命について考える機会がほとんどありませんが、

この地球に存在する命ある全てのもの、草木などの植物も人を含む動物も、目に見えないサイズのバクテリアなども、常に生命活動を営みながら日々変化し続けており、この世に存在する全てのものは、お互いに関わり合い、支え合って命と環境を保っています。

失えば二度と手に入れることができない命を平等に授かっていますが、失うと二度と手に入れることができないことを自覚できるのはおそらく人間だけで、このことを自覚できるヒトとして生まれたことは、なんと稀有なことでしょう。そうであれば、我々はときどき立ち止まって命について考えてみてはどうでしょうか。

(ふじもり おさむ リハビリテーション学部 教授 2022.10.18 実験動物感謝記念礼拝奨励)

日本におけるクライン夫妻の宣教活動 1883－1893年

笠 井 雅 直

イエスは言われた。『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の戒めである。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』』

(新約聖書 マタイによる福音書 22章37～39節)

1964年に名古屋学院大学が学校法人名古屋学院によって設立された時の理事長は、中日新聞社社主の大島一郎であったが、設立認可申請時は日本キリスト教団のジョン・B・カーブが理事長であった。このカーブ宛に、大学施設建設中の1963年にアメリカのメソジスト教会海外ミッション部門であるメソジスト教会伝道本部・世界伝道委員会東アジア担当幹事のセバーン・T・ブランボーから親書が届いている。大幸学舎での施設建設、そして瀬戸の用地を購入し、移転予定であることに対して、満腔の賛辞を送っている。その中で、アメリカ・メソジスト教会と名古屋学院の過去76年間にわたる親密な関係、これまで派遣したメソジスト教会宣教師の長年にわたる名古屋学院への奉

仕、そしてその結果として名古屋学院が発展することはメソジスト教会の世界的な宣教活動の誇るべき象徴として称賛し、引き続きの宣教師派遣と資金支援を約束している。

ミッションスクールと言われるキリスト教主義の名古屋学院大学の歴史的系譜は、1883（明治16）年9月に来日したフレデリック・チャールズ・クライン（ワシントンD.Cで1857年に生まれる）に始まる。クラインはアメリカ・メソジスト教会海外ミッション部門から派遣された宣教師であり、教職（長老）の資格を持っていた。横浜は貿易港であり外国人でも居を構えることのできる居留地であった。居留地内においてはすでに、ハリエット・G・ブリテン女史（1822年生まれ）

が1880年9月に来日し、ブリテン女学校を創立していた（同年10月）。1872年制定の明治の学制以降、小学校教育が全国的に開始された日本において、それに続く高等教育機関の設立によって宣教活動をすすめようという方針であった。特に女子教育においては1880年代半ばまでは女子教育反対の声が広く行き渡っていた日本ではミッションスクールの役割は大であった。

クラインは高等教育機関の男子学校を設立する使命を帯びて、日本派遣の任命後、アメリカ・メリーランド州などの教会・教区を遊説し、横浜での不動産購入のための募金活動を行っている。4千ドルは集めたという。1883年の来日前には、同じく海外宣教局から任命されたメアリー・エリザベス・パットンと結婚式を挙げ、その一週間後には、夫妻での来日となった（クライン26歳、メアリーは1861年にピッツバーグで生まれた22歳であった）。以後、クラインの宣教活動は夫妻ですすめられることとなる。

クラインは居留地横浜で男子学校を設立し、1886年には日本美普教会を設立し、初代牧師となる。クラインは1883年11月には英語教育を開始する。クライン自身も日本語を習得し、1884年3月には日曜

学校を開始し、1885年には男子の夜間英語学校をスタートさせる。翌1886年にはアメリカ・メソジスト教会の方針が男女共学から男子部・女子部の体制とすることになったことから横浜英和学校・男子部を開設するというように、暇のない活動であったという（女子部は横浜英和女学校となる）。英語夜学校だけでも150人が集まったという。クラインは1886年7月には横浜第一メソジスト・プロテスタント教会（日本美普教会）を組織する。これと並行してクラインは宣教活動の範囲を京都・大阪・名古屋方面に広げること考えていた。

クラインが名古屋に英語学校という拠点を確保したのは1886年であり、1887年、メアリーと共に名古屋に来る。同年7月には私立愛知英語学校を開校し、クラインは校主豊田一雄の「私雇の私立学校教授」となる。同年11月には名古屋英和学校と改称する。同校の設立申請は1887年10月に豊田一雄名義で愛知県教育課に提出される。設立認可申請書によれば同校の構想は6年制で、予科（四年制、中等部）と本科（二年制、カレッジ）の学校であり、教会、宣教師館を含む建設計画であった。横浜で試みた男子学校を名古屋で本格的に開校できたのであった。ク

ラインが担当した科目は、英語、倫理、理科であり、メアリーは英語、音楽、習字を担当した。クライン夫妻の名古屋への登場は、歓迎されたようで、クラインは高等商業学校で授業を担当し、メアリーはいくつかの公立学校で音楽を担当していたという。名古屋英和学校の催す感謝祭やクリスマスイブの出し物には見物客が絶えなかったという。

さらにメアリーは女子の教育塾を開塾し、自身も裁縫・料理・英語・聖書のクラスを担当し、1888年9月、名古屋英和女学校と命名するも他のキリスト教派の女学校との激しい競合関係におかれたという。因みに私立金城女学校（後の学校法人金城学院）が創立されるのは、1889年9月であった。

クラインの私雇主となる豊田一雄は、クライン夫妻とともに横浜から名古屋まで同行している。豊田一雄は愛知県師範学校・同中学校の音楽教師であったが、メアリーがオルガン演奏の名手であったことからオルガン演奏の教えを受けるために横浜まで出向いたのである。豊田一雄がクライン夫人から指導を受けたのは1886年9月から1888年8月までであった。仏教色の濃厚な名古屋の地において、霊的活力にあふれ、驚異的なエネルギーの

人と言われたクラインの宣教活動に対する警戒感は消えたわけではなく、それゆえ、豊田一雄が名古屋英和学校最初の校主となる（1892年からは丸山愿が校主となる）。豊田一雄自身も音楽と英語を担当し、丸山愿は英語、数学、宗教を担当した。

名古屋英和学校の設立に至ったことで、クライン夫妻は1888年7月の同校の夏期休業中、八週間にわたって愛知県知多郡と三重県下の休暇・旅行に出かけている。クラインは1888年9月には一旦アメリカに戻っている。新校舎建設のための資金調達の帰国であった（名古屋英和学校の新校舎の建築総費用は約5千ドルであったという）。1890年3月には名古屋に戻る（当初予定は1889年11月）。名古屋に戻るやクラインは、オールブライト、ヴァンダイク、そして校長を歴任し、宣教師たちの私雇主となっていた丸山愿、豊田一雄とともに名古屋宣教団を組織し、同年名古屋第一美普教会を創設する。

ついでに言えば、幕末開港以来、1899年までは、外国人宣教師が居留地外で宣教活動を行うための旅行・在留のためには、「私雇ノ外国人免許ヲ得テ居留地外ニ僑寓スル」という手続きが必要であった。この免許を得たとしても「外国人居

留地外僑寓中日本人民ト商売取引ヲ為ス」ことは厳禁となっていた。クラインの名古屋における「私雇」「雇主」が豊田一雄であり、丸山愿であった。

1890年4月、クラインは病氣保養のため、4月14日から横浜までの一週間の旅行を申請している。静岡県・神奈川県の通過許可証の申請であった。同年3月には、名古屋英和学校に神学科が設けられ、4月には宣教師館も竣工し、新校舎の完工も急がれる時期であった。おそらくクラインは横浜居留地のメソジスト教会関係者への報告と今後の日本での宣教活動についての相談のためかと思われる。クラインの宣教活動は次の段階に向かう。しかし、その後の1890年末、クラインは京都で手術し、一か月以上の入院となる。1891年6月にも、二週間神戸で静養している。

その背景には、名古屋における宣教メンバーとしてクライン夫妻以外に、オールブライト夫妻（1888年9月名古屋へ）とヴァンダイク夫妻（1890年2月名古屋へ）が加わり、名古屋地域で宣教活動を進めたことがあった。クラインの宣教活動は交通手段をフルに活用している。当初名古屋に来た時は海上ルートで横浜港から貿易港・四日市港に向かい、四日市

港から蒸気船で熱田港に到着するコースをとっていたが、東海道線は1889年に全通する（名古屋駅の開設は1887年）。これに対応して、1890年7月、ヴァンダイク夫妻とともにクライン夫妻は「學術研究乃為」として静岡県の奥津、沼津、静岡、清水港、焼津、藤枝、島田、堀ノ内、掛川、袋井、中泉、浜松、舞坂、鷺津、愛知県の豊橋、御油、蒲郡、岡崎、刈谷の東海道線沿線だけでなく愛知県知多郡の半田、大野、常滑、師崎、武豊、そして和知村へという「各地ニ旅行」という届を提出している。静岡県・愛知県において営業開始となっていた東海道線の奥津から刈谷までのすべての駅名があげられている。堀ノ内、中泉、御油は旧東海道の街道筋にあたる場所であった。各地を「各夫婦」「一通ずつの免状」を携えての宣教活動であった。ヴァンダイク夫妻とクライン夫妻がこれらの地を踏破したとすれば、驚異的な移動であった。このような宣教活動によって1892年2月に、ヴァンダイクは静岡地区の部長として、名古屋英和学校を退職し、夫人と共に静岡に移っている。旅行の目的として学研究のためとなっているのは、1899年までは、外国人の行動範囲は横浜・神戸・長崎ほかの居留地（とその周辺）に

限定され、旅行は許可制となっていたことがあり、学術研究・病気養生の国内旅行は許可されたためであった。日光や軽井沢が外国人の保養地として注目され観光地として先駆的となるのはこのためであった。

1891年10月には濃尾地震が起こる。当時、郵便電信局、尾張紡績などの威容を誇ったレンガ造りの建物は甚大な被害を受ける中、二階建ての名古屋英和学校はよく地震に耐え屋根と煙突の破損だけですんだが、教会にいた教師ヴァンダイク夫妻も負傷し、一名が死亡している。クラインも嘆き悲しんだという。

当初の名古屋英和学校設立時のクライン夫妻の在留予定は1887年10月から1892年9月までであり、「私立学校教授としての雇入れ」であったことから、1892年2月、クライン夫妻、オールブライト夫妻及び子供、ヴァンダイク夫妻が丸山愿の雇いとして居留地外住居・僑寓を届出て更新している。1893年4月、クライン夫妻はクラインの病気療養のためにアメリカに帰国する。日本・名古屋での在留期間は1892年2月から満五か年間であり、名古屋英和学校での教員の予定であったが、1895年9月、「帰国後の今日猶病気全治いたさず」ということで名古屋英和

学校から離れることとなった。

帰国後のクラインは、1893年から1908年まで、ペンシルバニア州、デラウェア州、メリーランド州で牧師を歴任し、1904年から1908年まで海外宣教部記録部書記となっている。1910年には、エジンバラでの世界宣教師会議の代表となっている。1913年にはチューリッヒで開催された世界日曜学校会議の代表となり、1919年10月には海外伝道局長として、海外伝道地を歴訪の折、名古屋中学校を訪れている。

クラインたちが構想した旧制の中等学校に続く高等教育機関は、1964年名古屋学院大学として果たされる。クライン夫妻来日の81年後であった。

本文が主に依拠したのは日本キリスト教団横浜本牧教会創立120周年記念委員会発行の『ジャン・克蘭メル論集 メソジスト・プロテスタントチャーチ・イン・ジャパン』（2006年）、横浜プロテスタント史研究会編『図説 横浜キリスト教文化史』（有隣堂、1992年）であり、本文の年月は愛知県公文書館、および名古屋市市政資料館所蔵資料によっている。掲載誌の

都合上、出典は省略した。なお、
本文は名古屋学院大学の創立記念
礼拝（2022年10月11日）において

お話しした内容をベースとしてい
る。機会を与えていただいたチャ
ペルの方々にお礼申し上げたい。

（かさい まさなお 現代社会学部長・教授 2022.10.11 創立記念礼拝奨励）

ウクライナと香港と私たち

松 谷 曄 介

平和を造る人々は、幸いである
その人たちは神の子と呼ばれる。
義のために迫害された人々は、幸いである
天の国はその人たちのものである。

(新約聖書 マタイによる福音書 5章9～10節)

今日は「平和を願うチャペルアワー」ということで、「平和」をテーマとする聖書の言葉を選びました。皆さんにとって「平和」とは何でしょうか。ロシアによるウクライナ侵攻が長期化しています。が、まずは戦争が終わり、日常が取り戻されることこそが「平和」であると言えます。

では戦争がなければ「平和」と言えるのでしょうか。また日本国内では戦争が起こっていないことをもってして、「日本は平和な国でよかった」で済ませてよいのでしょうか。戦争が起こっていませんが、もし民主主義や自由が制限されていたり、不平等社会であったりするならば、それは果たして「平和」であると言えるのでしょうか。もし、新聞やテレビ、SNSまでもが政府・警察に監視され、

自由に言いたいことを言えない社会、また経済格差・ジェンダーギャップの問題が深刻な社会は、果たして「平和」な社会と言えるのでしょうか。

ところで、香港という街の名前を皆さんも聞いたことがあると思います。日本ではよく香港と台湾の区別がつかず混同されやすいのですが、香港は中国大陸の南側にある小さな街です。小さいとはいっても東京都の半分、名古屋市の3倍の広さがあります。私はそこにある香港中文大学で2013年から16年まで研究活動のために滞在していました。香港といえば「100万ドルの夜景」、「東洋の真珠」といった経済都市として有名ですし、香港スイーツや飲茶、また香港映画のブルース・リーなどが知られていますが、近年、自由と民主主義、延いては平和のための民主化

運動が起っていました。

香港は100年以上、イギリスの植民地だったのですが、1997年に中国に返還されました。返還後も中国大陆とは違う法律が適応され、これを「一国二制度」と呼ぶわけですが、イギリス時代から受け継いできた自由な社会制度によって、キリスト教も盛んで、自由な精神にあふれた街でした。しかし、きちんとした普通選挙制度が整っておらず、不公平な制限選挙制度でしたので、徐々に中国政府の影響が増し、経済格差も広がり、社会の中での不自由さも増大していきました。

そのため、2014年・19年には民主主義と自由を求める若者を中心とする大きなデモが起こったのです。特に2019年の大規模抗議デモに際しては、政府・警察の取り締まりが強化され、何百・何千人もの青年たちが逮捕・拘束されてしまいました。その後、「香港国家安全維持法」という法律が施行され、民主主義・自由を大事にするメディアが禁止されたり、集会・言論の自由が大きく制限されたりしました。教育現場でも自由な発言が難しくなっているといえ聞きます。

実はこうした民主化運動の先頭には、多くのキリスト教信者がいました。香港は人口約700万人の内、約100万人のキリ

スト教信者がおり、また学校・病院・福祉施設の3～4割をキリスト教系が占めています。

では、なぜキリスト教がこうした政治運動・社会運動に関わるのでしょうか。

それは、「自由は神が人間に与えたものであり、神のもとにあっては全ての人が平等であるという人間観が民主主義の基本精神にある」と信じるからにはかなりません。キリスト教は決して心の内面世界のことだけではなく、民主主義や自由、平和といったこの世の事柄に関わることも大切な使命としているのです。だからこそイエス・キリストは「平和を作り出す者は幸いである」とおっしゃられたのです。

「平和」とは戦争がない社会だけではなく、誰もが平等であり、誰もが尊重される状態をも意味しています。香港をはじめ世界のあちこちで、そうした「平和」のための働き、自由と平等を求める運動が繰り広げられています。そして、それは日本の私たちの課題でもあります。私たちが日本において「平和」のため働く際、「全ての人間が神から尊厳を与えられ、皆平等である」という考えが重要になってきます。ですから、人間が神の存在を知り、謙遜にさせられるこ

うした礼拝・聖書・讃美歌・祈りは、実は平和を創り出す第一歩でもあるのです。

(まつたに ようすけ 金城学院大学 宗教主事・准教授 2022.7.22 平和を願うチャペルアワー奨励)

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」等のお話をブックレットにまとめています。ご希望の方は、キリスト教センターへお問い合わせください。大学ホームページからもPDFファイルでご覧いただけます。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洗善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(相木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？」
—こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別—
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなにに人？一問(はざま)から読む聖書—」
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィツシュ〜夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)
- No.19. 「命のことば」(水谷 誠)
- No.20. 「宗教が戦争の原因？—神教がアブナイ？」(桃井 和馬)
- No.21. 「福田敬太郎——神に向き合った生涯」(小野 静雄)
- No.22. 「F.C.クラインと『敬神愛人』」(黒柳 志仁)
- No.23. 「祈りつつ学び、感謝しつつ働く」
—内村鑑三、名古屋英和学校赴任のころ—(葛井 義憲)
- No.24. 「NHK連続テレビ小説『エール』とキリスト教
キリスト教主義大学が大切にしたいこと—『敬神愛人』(西原 廉太)
- No.25. 「『迷い出たダンゴムシのたとえ』がわたしたちを生かす」
(早瀬 和人)
- No.26. 「中山間地のソーシャルワーク」(越智 祐子)